

## 参考図書紹介

### 養蜂とハチミツ狩りの世界の歴史

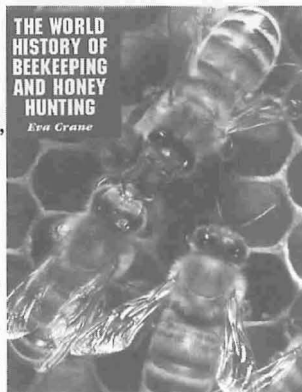
Crane, E.: The World History of Beekeeping and Honey Hunting. Gerald Duckworth & Co. Ltd., London. 682pp. 1999. ISBN: 0 7156 2827 5

巻頭に「この本をミツバチの研究を続けてきた人々とその記録に捧げたい」で始まる Crane 博士の「養蜂とハチミツ狩りの世界の歴史」と題する 10 部、54 章と 2 編の付録、53 の表と 525 の図、多数の精選された引用文献で構成された大著が出版された。

Crane 博士は、1983 年に実際に見聞した、あるいは収集した資料から人間とミツバチの関わり合い、養蜂の歴史を紹介した「古代養蜂」を出版した。さらに 35 年間の国際ミツバチ研究協会 (IBRA) 会長としての経験をもとに、1990 年に発行した「ミツバチと養蜂—基礎と応用・世界の資源—」は、ミツバチ科学、養蜂に関するデータを分かりやすく提示した名著となっている。本書はその続編と言えるもので、「古代養蜂」発行後に集められたデータを取り入れ、生活の糧としてのミツバチの飼育や、その成功した飼育方法について、世界の歴史について紹介している。

第 1 部は 2 章から 5 章で、世界中の蜜を貯蔵する昆虫の生態と習性に関する基本的な情報を扱っている。第 2 部は 6 章から 13 章で、人類の日和見なハチミツ狩りに関する古代狩猟民族の内容である。第 3 部は 14 章から 17 章で、所有していたり、手をかけて守っていた巣からハチミツを採集する歴史についてふれている。第 4 部は 18 章から 19 章で、アジアの開放空間にある蜂群の管理と飼育についてである。第 5 部は 20 章から 32 章で、巣箱を使った養蜂発展の歴史を解説している。おそらく飼う目的を持って巣箱が造られたのは、紀元前 5000 年から 3000 年の間のエジプトで、使用された固定巢板式巣箱による伝統養蜂の歴史を詳しく述べている。第 6 部は 33 章から 37 章で、伝統的養蜂と可動巢板式養蜂による養蜂実践の歴史を追っている。セイヨウミツバチが土着種として発見されてか

ら現在まで、どのような巣箱であろうと養蜂は常に行われてきた。33 章、34 章は養蜂家がハチに刺されるのを防ぐための面布、燻煙器の変遷について述べられている。36 章では、1600 年代にセ



イヨウミツバチが南北アメリカ大陸に導入された時の運搬方法、さらにセイヨウミツバチが世界中に持ち込まれた詳しい年代がまとめられており、興味深い。第 7 部は 38 章から 40 章で、1851 年にラングストロスが最初に可動式巢枠を使った実用的で、近代的な巣箱を考案した歴史を踏まえ、巣箱を用いた養蜂の発展を解説している。第 8 部は 41 章から 45 章で、可動巢枠式巣箱による養蜂で、世界中でのセイヨウミツバチの管理方法について述べている。第 9 部は 46 章から 51 章で、ミツバチ生産物の歴史についてである。ハチミツは常に第一のミツバチからの生産物であり、食糧としてまた薬用として用いられ、多くの地域ではハチミツ酒が生産されたことなどについて解説している。第 10 部は 52 章から 54 章で、ミツバチが何を集め何を生産しているか、またミツバチの生態についての科学的研究の発展を追っている。また世界中の宗教で、ミツバチ、ハチミツ、ハチロウが果たす信仰上の役割に関することが述べられている。付録 1 では、紀元前 2000 年から紀元 1600 年までの中国におけるミツバチ、養蜂、ハチミツ、ハチロウに関する文献、付録 2 では 29 か国の歴史的な内容を含む養蜂博物館のリストが掲載されている。

ミツバチがいかに、人類と密着してきたかを感じさせる一冊である。 (吉田 忠晴)

## 待ちに待った日本蜜蜂飼育法の書

吉田忠晴：ニホンミツバチの飼育法と生態。玉川大学出版部，東京，135pp. 2000. ISBN4-472-40081-2. 定価 2000 円。

長年，玉川大学でニホンミツバチの研究をしてきた著者が日本全国とアジアの伝統的な養蜂を参考に，著者自身も試行錯誤と失敗を繰り返しながら得た貴重な経験に基づいて書かれた本である。

内容は，10章に分けられ付録にセイヨウミツバチの飼育法が付いている。I章のニホンミツバチの魅力では，「ニホンミツバチ」って？に答える形でこの蜂を紹介し，「人間との知恵の駆け引き」として，日本の四季に適応しているがこの蜂を飼うことの難しさを説いている。II章の養蜂の歴史では，日本書記の時代からの技術が現在まで引き継がれ，アジア各地に共通性があるという驚くべき事実が語られている。III章の生態，IV章の飼育法と採蜜では，写真と図が多用されどんな初心者にも充分理解できる内



容となっている。また，著者らが中心になって考案し，すでに多数の飼育者のいるAY巣箱と可動式巣枠での飼育と遠心分離器を用いての採蜜方法が紹介されているが，これは，一匹のミツバチを殺戮することを嫌った著者の恩師である故岡田先生のお教えと推測される。V章の野生の営巣場所，VI章の各地での伝統的な飼育と採蜜では，日本各地でたくましく生き抜く彼らと，特色を持った飼育と採蜜の中から，特に紀伊と対馬での蜂を殺さない方法が紹介されているが，これが著者の研究の出発点かと思われた。VII章のニホンミツバチの新たな利用では，セイヨウミツバチと比して低温での訪花性と長時間採餌活動を生かしてのハウスへの導入について語られている。VIII，IX章では，世界中のミツバチとアジアの養蜂を紹介し，自宅の壁に空洞を作り，内側から巣蜜の一部をいただくのを羨ましく思ったのは私一人だろうか。X章は，ニホンミツバチとセイヨウミツバチの相違点を述べており，大敵のオオスズメバチとの戦いに勝利する日本丸に拍手を送りたくなる。

付録セイヨウミツバチの飼育法を見て，これから養蜂を始める蜂友の来たらんことを願うフリッシュ博士の弟子の一人である。(人見 吉昭)

## 養蜂・来た道への郷愁

中村源次郎：養蜂 来た道への郷愁。(株)秋田屋，岐阜，205 pp. (自家版)

私が，秋田屋本店に初めて伺ったのは，昭和26年8月だった。岡田一次先生が「卒業論文を纏める前に，日本近代養蜂の先駆者の方々のお話を，岐阜へ行って聞いてきなさい」とのご指示によるものである。

戦災を免れた秋田屋本店は，木造の立派な旧家だったことを鮮明に記憶している。源次郎氏は私より3歳年上で，同志社高等商業学校在学中に学徒動員で中国に渡られ，終戦後，新制の同志社大学に復学されていた。しかし，22年お父様のご逝去により同志社を中退して，秋田屋本店の代表に就任されていたので，お父様が日本の養蜂産業発展のためにご苦労されたこと，その遺志を継ぎ頑張る覚悟を，顔を紅潮させな

がら話していただいたことを思い出し，感慨無量で本書を一気に読ませてもらった。

本書は，波瀾万丈の半世紀を養蜂一筋に生きた源次郎氏の「自分史」であり「日本養蜂の戦後史」とも言える貴重なものである。正確で，詳細な記録をもとに，日本養蜂の歩み，次々注目されてきたミツバチ生産物（本書では，伝統的に蜂産品）の様子，新しい病虫害に苦しみその対策への苦労，数多くの国際会議への出席と国際交流，新養蜂器具の開発，ミツバチとその産物のPR，そして最後にこれからの日本養蜂について述べられている。

常に「ミツバチへの感謝」の気持ちを持って書き続けられた本書の後半は，平成10年1月手術の後，体力の衰えを気力で支えながら年末までに書き上げられた由である。平成11年3月2日他界された著者に心から敬意を表し，ご冥福をお祈り申し上げたい。(酒井 哲夫)